

授業にかける



授業について考える

昭和四十年代後半から昭和五十年代前半というのは、高校進学率が飛躍的に高くなり、多くの新設校ができた時期でもありました。この頃、よく言われたことに「高校生の多様化」ということがありました。価値観の多様化、学力の多様化などが急速に広がり、それに伴って生徒指導も難しくなってきました。

数学を学ぶ楽しさを少しでも多くの生徒にわかしてもらいたいという意欲に燃えて教員になったのですが、授業ではむしろ数学を苦手とする生徒が多く、指導内容をどうやって理解してもらおうかと四苦八苦の毎日でした。中学校までの既習事項の定着が思うようでないために、なかなか高校の学習がうまくいかないという状態でした。仕方なく復習のためのプリント教材などを作って、必要に応じて復習しながら授業を進めていきましたが、うまくいかないことも度々あり悩み多い時期でした。教師が説明や指導に苦しみ、生徒が理解に苦しんでいる授業では、生徒も教師も楽しいはずがなく、授業効果も期待できません。

この頃、当時の県教育研修センターで「数学を苦手とする生徒の指導」をテーマにした研修が多くもたれましたが、そこでよく言われたことは、教員は教科書を教えるのではなく、教科書を使って教えるのだ。生徒が理解できないのなら、理解できるように教科書を書き換えるくらいの勢いで教材開発に取り組んで欲しいということでした。当時の数学の指導主事の先生方の励ましとご指導を戴きながら、いろいろな教材開発に努力した頃を思い出します。やはりなんと言ってもわかり易い授業が一番です。「先生、今日の授業はよくわかったよ。」という生徒の声と一所懸命に授業に取り組む生徒の姿が何よりも嬉しく、

充実感を感じることができました。生徒の反応は正直です。教師が授業の準備にどれだけ努力をしたのかが問われているのだと実感しました。

四十代になって進学校に勤務したのだと実感しました。自分などよりも数段優れた素質を持っている生徒たちを指導できることが大変な喜びであると同時に、より伸ばさなくてはということをとて重圧に感じました。生徒が自ら考え抜く力を育て、生徒の持っている力を十分に引き出すことを常に考えながらの授業でしたが、ここでは授業はわかり易いだけでよいのかと考えるようになりました。勿論、わかり易い授業は大切ですが、わかり易さを追求するあまり、生徒への負荷が少なく、深みに欠ける授業になってしまうのではないかと思いました。

そんな時、内容が複雑かつ高度で、わかり易い説明がうまくできないことがありました。すると、授業後何日か経ってから、生徒がこういう風に考えたら理解できたとか、それはこのように発展するのではないかなどと言ってくるのです。特に意図した訳ではありませんが、結果として生徒に十分に考えさせることができた授業になったのかと感じることも多々ありました。教育産業の発達などの影響もあり、教育界全体が何となく親切すぎるような風潮の中で、生徒を苦しめながら鍛え、結果として生徒の力を引き出していくような授業の大切さも痛感しています。

「授業第一」「授業が命」などとはよく言われますが、生徒の学校生活の中心が授業にあることは言うまでもありません。わかり易く充実した授業、そして生徒の力を引き出し高める授業はどうあるべきなのかということを常に頭に置く必要があると考えます。

家庭科の教師として心がけていたこと・やり残したこと、二題

一 「経験だけに頼らない授業」

家庭科は家庭生活を丸ごと扱う教科です。衣・食・住・保育・介護など、人間の生活や暮らしを題材として学習を進めるために、学問としての価値を見いだしにくいといわれることがあります。時に、「家庭科を学校で学ぶ意味があるのか」といわれる理由です。

本の題名は忘れましたが、「家庭科の教員として私自身忘れられない一節があります。」
「家庭科の授業は、経験のない教師の在り方を見事に表現していると思います。と同時に、自分自身への戒めの言葉でもありました。衣・食・住・保育など何を題材としても、生徒は多少なりとも日常生活の中で見聞きしますが、生活経験の少ない生徒にとつて、教師の経験談は多いに興味・関心を引くことになりました。しかし、家庭科で大切なことは、経験に基づく事柄をいかに科学的・学問的に裏付け、その原理・原則を理解させるかです。今日社会の進歩はめざましく、それに伴い家庭科が扱う題材も変化しています。こうした変化に対応していくために必要なことの一つが、教師自身の豊かな経験とそれを裏付ける科学的な知識であろうと思います。家庭科の教師としてそのことを自覚し、常に学ぶことではないかと思えます。

二 「親となるための教育」について

平成六年四月施行の学習指導要領で、家庭科は初めて男女必修となりました。理由は、

男女共同参画社会の推進という社会的な使命と、同時に、家庭の教育力が低下する中で、親となるための教育を家庭科が担うことにあつたと思つています。そのことは現行の学習指導要領においても、今回の新指導要領の改定においても変わらない柱であるはずで

す。しかし、多くの場合、男女必修修になつたことで、男子の調理実習や被服の授業をどのように組み立てるかなどに力点が置かれがちでした。そのことは、指導主事であつた私自身が多に反省するところです。家庭科がねらいとしているのは、「一人暮らしをする時のために、男子も料理ぐらひはできた方がよい」といったことではないはずで

す。「将来社会人として、男女がどのように協力し、どんな家庭を築いていくのか」「父親・母親の役割とその責任とは何か」を、家庭科の授業を通して生徒に問いかけ、気付かせることにあります。衣・食・住・保育・介護などあらゆる学習の延長線上に、将来の家庭人としての、親としての在り方・生き方があり、家庭科で学ぶ知識や技術は、全てそうした在り方・生き方を支える土台であつて、目的ではないことを、教える側の教師が常に認識しながら進めるべきだと考えてきました。

現在、多くの学校で家庭科の履修単位が二単位となり、少ない単位数の中で何を学ばせるかが大きな課題となつています。しかし、昨今の社会情勢を考える時、家庭科の果たすべき役割は自ずと見えてきます。私自身は目先のことに追われ、何もかもが中途半端でやり残したことがかりですが、後輩の先生方のお力で、高等学校における家庭科の役割を、より明確なものにしていただきたいと強く願つています。

私の原点

ある先輩の教え「授業の中で、何か一ついい……」

新任校での四年間は、私の教員生活の原点となった。授業も、教員としての取り組みも。「理科嫌いをつくらないこと」、茂木高校の理科の先生方の合い言葉であった。ある先輩教員に大変お世話になった。私の専門外の科目、物理(こういう言い方をすると、おしかりを受けるかもしれない。理科の教員は理科のすべての科目が専門科目なのだ)を教えることになった。心もとない私を見てのことだろう、新学期早々「私の物理の授業を見ませんか」と先輩から声をかけてもらった。ありがたいことだった。

毎週一時間、一学期の間ずっと見せてもらった。授業の進め方や実験、生徒への対応など、多くのことを学ばせてもらった。そしてその先生がある日、語ってくれた言葉は、今でも忘れない。

「一時間の授業の中で、何か一ついい、生徒に見せられるものがあるといい」

この言葉を今も忘れず、授業に向かう自分への戒めとしている。授業への慣れや校務の忙しさから、平坦な授業になりがちな自分の授業。でも、この言葉を思い出すと、なぜか緊張感めいたものが自分の中に生まれてくる。そうだ、何かないか、とあたりを探し始める。実際のもの(本物)、身近な物でいいものはないか。簡単な実験はできないか。モデルになるものはないか。良い映像はないか……。生徒がいきいきとでき、学ぶ楽しさを感じられる授業。理科嫌いをつくらない、理科が好きになるような授業をしたい。

生徒から教えてもらったこと

これまで約二万時間も授業を行ってきた。なんともすさまじい時間である。同じような内容を何度も教えてきた。でも、この二万時間の中に、うまくできたと胸を張って言える授業は、どれほどあったろうか。うまくいかなかったとき、後味の悪さが残り、憂鬱な気分になる。次の授業こそと、何度思っつてやってきたことか。

それでも生徒の中には、こちらの気持ちを感じ取ってくれて、私に暖かいメッセージを送ってくれる。近頃ある生徒からももらった手紙に、遅ればせながら私はある発見をした。

「物理の授業、すごく楽しかったです。すごく難しい物理だけど、問題が解けるとすごい達成感だ。楽しい物理。なんで楽しいのかな」と思ったら、先生がすごく楽しそうに実験をやったりしているからだ!と思いました。」

どうしたらいい授業ができるか、永遠のテーマであると思ってきましたが、その答えの一つを、その生徒から教えてもらった。私が楽しいと感じて授業をしているとき、生徒も共に楽しく感じている。そのときいい授業?ができているのかもしれない。

似たようなことを生徒に言われたことがある。「星の勉強は楽しい。先生、星の話になると、目が輝いているよ!」と。星が好きな私は、星や宇宙の話をしたりするとき、夢中になってしまいうらしい、そうかもしれない。いい授業、それはとても難しいテーマであるが、少しばかり答えが見つかったような気がする。教員生活も残りわずかとなったが、先輩の教えに感謝しつつ、これからも生徒たちと共に学び、成長していきたいものである。

誕生したばかりの足利西高で、新採教員として昭和四十七年に教壇に立った。生徒たちは縦横関係の会社で働き、眠い目を擦りながらも学ぶ意欲に燃え、学ぶことに喜びを感じていた。そのような生徒たちとの六年間で多くのことを学び、教員としての原点を培った。今の自分があるのは同じ場所、同じ時間を共有した生徒、先輩や同僚の先生方との出会いがあったからだ。当手を振り返るといつも感謝の気持ちと懐かしさで一杯になる。

授業で「縦横十センチメートルの正方形の厚紙の四隅から、同じ大きさの正方形を切り取り、残りの部分を折り曲げて、ふたのない箱をつくる。このとき、この箱の容積の最大値を求めよ。」という問題を解くことがあった。中学生でも解けると話したことから授業が盛り上がった。厚紙で箱を造って四段重ねる。縦、横、高さの和が一定になる。これで最大値が求まる。三項の相加・相乗平均の不等式まで授業を展開することができた。しかし、問題を解くのに特殊な方法を探すのでなく、数Ⅱ、数Ⅲの微積の概念をしっかり学びなさいと付け加えた。

素数は面白い数である。「ある数が十一の倍数かどうかの判断は、一の位の数を十の位の数から引く。一の位はなくなつたものとする。これを繰り返して、0になれば十一の倍数になっている。」生徒と考えているが、七の倍数かどうかの判断で綺麗な方法が見つからずにいる。素数の話から始まり、フェルマーの小定理まで脱線し、暗号の話まで進む。十年以上もテレビ番組欄のGコードの解説ができそうで、できていないでいることを話し、解説のチャレンジを呼びかける。

情報教育に携わって二十年以上になる。ニューメディア、マルチメディア、ITと絆糸曲折しながら発展してきた。インターネットは役立つもので、便利さを感じる。しかし、携帯電話には、あれば便利だろうと思うが、なくても不便を感じない。キャッシュカードもなくて不便を感じない。生徒にコンピュータ犯罪や携帯電話のトラブルについて話すとき、「持たない」という選択肢があることを強調する。

三年生の数学の授業の最後に話し続けていることがある。「数字を読むときに四桁でコンマを打つようにしませんか。」三桁でコンマを打てば英語読みするとき便利で、世界共通になっているが、日本語で大きな数を読むのには四桁ごとにコンマを打てば誰にも間違いないと読める。日本語は四桁ごとに読むようになってきているのだから。

突然に、東海道を歩いてみようと思ひ立ち実行している。電車でA地点まで出かけて、B地点まで歩く。B地点から電車で帰る。これを繰り返して京都に辿り着こうとする計画である。しかし、この計画が実行できるのは交通費が安上がりで済む青春十八切符が発売されている夏、冬、春に限られる。間近に見えている富士山は、一日歩いても見える方向に変化はない。田子の浦海岸から見た富士の高嶺の雪は素晴らしくたろうが現在の海岸には趣がない。川幅が広い川は大井川だけではない。疲れて歩いているとき声をかけられると元気が出る。歩道のない道路は沢山あり、車優先の社会を実感する。生徒に東海道を歩いている話をするところがある。話し終わって、「もし、困難に突き当たり、悩みや迷いが生まれたら、勇気を持って、体験の一步を踏み出してみませんか。」と聞いてみる。

授業に思うこと

「歳月人を持たず。」三十七年間の教員生活にピリオドを打つことになった今、後輩の先生方に伝えられる知恵をどれほど蓄積してきたか、自責の念にかられる思いです。

私は大学を卒業して一年間民間会社に勤めてから教師になり、新設校のS高校に赴任しました。授業以外に校務分掌があることなど全く知らず、毎日戸惑ってばかりいました。また数学を教えていましたが、授業を真面目に受けようとせず、注意をしてもいうことをきかない生徒も多く、どう指導してよいか分からず、授業に出ることに苦痛を感じていました。ある日の授業のときです。問題演習の机間指導をしていたとき、いつもふざけているA男が突然「先生、これでいいの？」と声をかけてきました。正解でした。「これあつてるよ。たいしたものだ。」と本心から応えてやると、目を輝かせて喜びました。彼が心の中で「できたぞ、やったあ。」と歓声を上げたかのように、私には思えました。このとき、教師を続けていけそうな気が湧いてきました。彼の笑顔は今でも忘れません。

授業がつまらない、分らないほど辛いことはない。つまらなければ寝るか、じゃまするか。しかし誰でも分かりたいという願望は持っている。だから分かった時はうれしい。五十分の授業をどうすれば飽きさせないか。これが授業に対する私の原点です。特に新しい単元の導入部では興味関心が湧く実験や操作活動を取り入れました。授業が教師の一方的な説明中心の講義でなく、生徒との質疑応答を繰り返すコミュニケーションの場（一種の劇場）になるよう工夫しました。しかし、十分教材研究をしてシナリオを用意して授業に臨んでも満足できる授業はなかなかできません。毎時間の指導案を作って授業をして、

授業後の反省をもとにまた指導案を作る。毎日PDCAサイクルを繰り返すことが、分かる授業を目指す基本だと思います。分らないのを生徒のせいにするわけにはいきません。

学力の向上の基本は言うまでもなく日々の授業の充実にあります。学校では公開授業・研究授業・授業参観等さまざまな対策をとって授業改善を図っていますが、最終的には教師本人の自覚と意欲にかかるとでしょう。経験上授業改善のために一番効果的だったのは、生徒に授業を評価してもらうことでした。生徒の率直な意見はハツとすることがあります。

よく「教師は授業で勝負する」と言われますが、授業の究極の目的は知識や解法テクニクを指導するばかりではありません。授業を通して生徒との信頼関係を構築して、一人ひとりに人間としての生き方を示すことです。授業の中に人間性がにじみ出てこそ、良い授業と言えます。時には、教科に対する熱い思いを話したり、感銘を受けた本を紹介したり、興味関心のあることや趣味のこと、そして人生観を話せるとよいでしょう。

教職二十年目研修の折、受講者の間で「今何やっているの？」「○○主任やっているよ」という会話を交わしているのをよく耳にしました。長い教師生活においては勤務校や年齢・経験などによって、いろいろな立場（校務分掌）を経験することになります。立場が人を作るとも言われますが、仕事が忙しくなるほど責任も重くなります。教科指導はもちろん、生徒指導、進路指導、学年経営等多方面にわたって資質や能力が求められます。しかし、これらの校務の合間に片手間で授業をしているとか、始業ベルがなってもいつも教室に遅れるなどでは本末転倒です。どんな立場になっても授業を大切に。